

## 長澤定夫回想録（その一）：引揚げから炭鉱へ

長澤，定夫  
元三井田川炭鉱

<https://doi.org/10.15017/13890>

---

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 24, pp.77-81, 2009-03-19. 九州大学附属図書館付  
設記録資料館産業経済資料部門  
バージョン：  
権利関係：

## 【回想】長澤定夫回想録（その一）——引揚げから炭鉱へ——

長澤定夫

### なつかしき炭住生活

（福岡市社会福祉協議会ボランティア・センター『文集』第一〇九号、平成十五年四月）

北朝鮮平壤郊外の片田舎で誕生し、平壤市内で育ち、昭和十八年十二月、平壤歩兵七七連隊に入営し、病院付衛生兵であったのが幸ひし、看護学校教育中に動員下命された平壤第三十師団は、僅かの基幹要員と、教育中の衛生初年兵と経理候補生を残し、殆ど全員風雲急なる比国ミンダナオ島に派遣され、十九年十月、マッカーサー元帥指揮の米海兵隊がレイテ島に上陸するや、苦戦中の第十六師団救援のため、十二月、新郷連隊長指揮で二ヶ大隊が逆上陸し、米軍機械化部隊と戦闘し、二十年八月、終戦時には現地農民に助けられし三名を残し、全員レイテ島で戦死された。今、改めてご冥福をお祈りする次第である。

留守師団の補充されし召集兵は、終戦後、本土新潟へ送還の名目でシベリアに送られ、罪人同様、飢えと寒さに喘ぎ乍ら重労働に服した

が、当時小生は、伝染隔離病棟の主任であったが、捕虜となる寸前、ソ連兵の立哨しおる前を素通り脱走、二㎝直系の方向磁石と、五百万分の一の地図を頼りに、昼は山中に潜み、夜間道路を歩行し、十三日を費し三十八度線を越え京城に到着、昭和二十年十一月、博多港に単身着のみの哀れな姿で上陸したが、朝鮮で育った関係上、親族も他人同様で、食糧難の生活状態をすぐに直感し、若く元氣旺盛な頃ではあるし、当時炭鉱は特需景気で、寝具貸与、作業用具支給で募集中であったので、此の好条件につられ応募、坑内の炭車道の保線工事夫となり、馴れぬ作業についた。

採用になった炭鉱は三井鉱山田川鉱業所の第三坑で、此の坑が炭坑節の発祥の地で、月が出た出た月が出た、三井炭鉱の上に出た、あんまり煙突が高いので、さぞやお月様けむたかろう、歌詞の通りで、三坑には六坑まであった各坑に送電する火力大発電所があり、その発電用に必要な蒸気を上げるポイラー燃焼の煙りが、二本の大煙突から出ていた黒煙りで、廢坑になった現在も、石炭資料館の敷地内に豎坑の櫓と共に保存

されている。

寮より真面目に出勤を続けていたためか、二十一年九月、両親と二人の妹が無事引揚げて来たが、寮長、賄婦の情けで、即刻其の日の夕食と、寮の会議場の広間に四人分の寝具を貸与して貰い夜露を凌ぐことが出来た。寮長の計らいで、翌日より姉が臨時賄の手伝いに雇われ、一人分口がへり、引揚者の悲惨な生活に同情された。女性であったが社宅内での顔役の口添えで立派な社宅に入り、寝具も寮よりその俣使わして貰い、人情味厚き向う三軒両隣りより炊事用具も寸借して、其の日暮らしの生活を始めた。

社宅は五軒長屋で、毎朝十時には朝の挨拶と同時に、各戸バケツに水一杯出し合つて排水溝の清掃、これも親しみの深くなる楽しみな仕事であった。食事台の代わりとし学習机の足のないものを頂戴、失明せる老父親と十五歳の妹が炊事、掃除留守番をし、母親は農家に食料の買い出しに出掛け、逐次生活必需品も整い出した。炭坑であったので燃料だけは不自由せず、又大浴場が近くにあり、着替えの衣料も無けれども、寒さだけは凌ぐことが出来た。

二十二年正月には、社宅を世話された女侠客の母親より家族五人分の小餅の差入れがあり、嬉し涙で雑煮を口にした哀れな元旦であった。

捺印するに必要な朱肉を隣家に借用に行けば、メンタムと同等の軟膏のアースタムの小空缶に分け貰うなど、物資不足で不自由な生活であれど、隣人愛に恵まれ親族の援助を受けずして日を過ごせるようになった。今日でも其の朱肉は携帯して使用している。使い捨てのごみの山となる、飽食時代の豊かなる現代生活ではあれども、今一度、半世紀前の炭住生活に立ち返り、荒城の月、影を慕いて、明治一代女などの不滅の

名曲を軽音楽で聴きつつ、一献汲み交し、往時の苦労話に花を咲かせたものである。

三井田川鉱業所は、昭和三十九年四月に閉山となり、炭住跡地は二階建てのアパートに立て替わっている。

### 炭坑様々

(福岡市社会福祉協議会ボランティア・センター『文集』第一一〇号、平成十五年七月)

北朝鮮平壤より、ソ連軍の捕虜になる寸前、軍隊を只一人で敵前逃亡し、両親、妹二人を残し、三十八度線を目指し十三日間歩き通し、京城で一般引揚者に交わり、博多港に上陸しても逃亡兵であることを恐れ復員届もせず、二十一年一月、坑員募集中の三井鉱山田川鉱業所第三坑の坑内仕繰夫に採用され、寝具貸与の寮生活に入った。仕繰とは坑内で落盤防止の枠入れかと思つて入坑したら、炭車(トロッコ)が通る保線の仕事であった。

坑道の枠入作業を炭坑語で切上げと言ひ、保線作業は坑道が地上の圧力で車道が持ち上がり、炭車の運行が悪くなるので、岩盤を三十程程鶴嘴で掘り下げ、岩石(ボタ)を炭車に積む作業を盤打ちと言われていた。坑内では先輩の技術坑夫を先山と言ひ、新参の見習いを後向きと言ひ、先山の小使役であった。作業の割当指揮者が係員で、その日の作業内容箇所を指示されて入坑するのである。此の集会所を繰込場と呼ばれていた。

係員、先山に対して、炭坑独特の荒い方言でなく標準後の敬語で答弁

するので、多少好感を持たれたせいか、力がいり骨の折れる盤打ち作業でなく、好人物の先山二人と共に案外楽な車道修理が毎日続いた。ある日、四米程長さの車道（レール）を一人で担ぎ、炭車捲揚機のロープの下を潜り立ち上がった途端、車道の後端がロープに当たり、右肩胛関節を脱臼して労災（公傷）で休業することになり、退屈しにぎに貸本屋より寸借して毎日読書で過ごし、三日毎に通院診察を受けるが、外傷でなく関節痛なので、まだ痛いと言えば休業の診断が続いたが、三ヶ月後、炭坑から派遣された常駐の公傷係が「そろそろ出勤したどうか」と、自分の間身体を馴らすようと、二週間の坑外軽作業の証明で就業することとなった。

軽作業を取り扱う所が保安部であった。保安部は坑内の危険箇所の特検、坑員の入坑時の危険物（煙草）などの所持品の検査、労災手続申請、作業の安全講習などする取締機関で、炭坑では警察署のような所である。作業内容は、製材所で出る製材屑（木片）を四十糎に切つて、職員家庭の燃料用に束にする仕事で、別にノルマがあるではなく、拘束八時間が立てば終了であった。一応、坑内作業の入坑伝票が発行され、当時一般家庭の主食の配給は雑穀込みの二合三勺であったが、坑内出勤すると六合、家族全員三合の加配があり、坑外で軽作業をしても坑内並みの特別配給が受けられた。

証明期間が経過すると、「坑内作業はまだ無理」だと言って追加証明を貰い、二ヶ月遊ばせて貰えた。さすがに財閥の三井様と言われていただけに、一鉱員の些細なことなど何のことはなかった。半年振りに坑内現場に戻った途端に、初めて約十人で行う盤打の組に廻された。責任者である先山は気性が荒く、作業も重労働で、作業の割当箇所も先山次第

で、随分骨折れ方も違ったものである。石の上にも三年という諺通り、一応作業にも馴れ、内容も把握理解出来、担当係員よりも多少重要視され始めた。

坑内作業の入坑時間は、朝午前七時を一番方、午後一時乃至二時を二番方、夜九時からの夜勤を三番方と言ひ、採炭が一番方、二番方の時は、仕繰は採炭のない時間帯の空方三番方で深夜業となる。採炭が二、三番方の時は、仕繰は一番方となる仕組みで、何事も採炭が優先であった。

坑内作業も、苦手の盤打ちをすることは少なく、車道の枕木を坑外製材所より坑内に送り込む作業、一人では採炭作業中に車道が不通になった折の応急修理する当番大工役、車道延長に必要なボルト、ナット、金切鋸の刃、犬釘、座金など必要工具の受給は、坑区外の工作工場の機材倉庫に受取に行く使役、これには係員が請求伝票を記入捺印し、坑内係長、坑長の印鑑が必要でそれを貰い、機材を受取り入坑時に繰込場に届ける。このように頭を下げる面倒な仕事は、一般坑内夫には不向きであるが、馴れたもので、係員でさえ足の重くなる鉱業所本部鉱務課に提出する書類でも、嫌な顔をせず引き受けていたが、坑内で盤打ち作業をすると思えば、走り使いは楽なものである。

これまで労働組合（炭労）は賃金上げ交渉にはスト権を発動し、要求額を獲得する慣習があったが、昭和二十四年頃より安価な重油に転換する企業が出始め、石炭需要も下火になり、坑員採用は中止となり、経営者側からは低能率者の解雇予告が労組へ通告され、労組が承諾後に解雇された者は、仕事の出来の悪い低能率者ではなく、意外にも組合活動に熱心で職場集会を開く、職員にクレームを付けるなど口達者なものがほとんどであった。六ヶ月後にはGHQ（マッカーサー司令部）よりの通

達でレッドパーヅ（共産党排除）で一斉首切りが実施された。

勤務年数も四年たつが、出世する意欲はなく、その日稼ぎの生活を続けて、三年八ヶ月後に希望退職するが、その間の作業内容は後述する。

### 続炭坑様々

（福岡市社会福祉協議会ボランティア・センター『文集』第一一一号、平成十五年十月）

北朝鮮平壤から引揚げ、生活難のため一時凌ぎのつもりでの坑内作業ではあったが、四年の歳月が流れた。一応保線工事にも馴れ、先山先輩にも顎でこき使われる事もなく、担当係員（技手管理職）からも信頼され、採炭操業日以外の休日作業も、坑内夫は労働基準法で一ヶ月二日の公休出勤が認められており、毎月二十七日乃至二十八日出勤したものである。

同じ職場に、元博多商人が内職で久留米付近が産地のハゼの実から抽出した、木蠟とカセイソーダを煮詰めた寒天のような含水石鹸を、原価十八円で分けて貰い、小売二十五円で木箱に二十個入れ、一km離れた燐坑の二坑社宅に、勤務の合間に売り廻り、結構小遣錢稼ぎになり、若干の蓄えも出来始めた。炭坑では、出勤した日を「方」と呼んでいた。一ヶ月二十七日満動して、月給七千円程度と記憶している。商売意欲が出て自転車を求め、家庭訪問販売を止め、食料品店、荒物雑貨店などに卸す業となり、坑内満動して月給と同額かそれ以上の収益が得られた。

当時独身で体力はあり、坑内の保線作業と石鹼卸の二刀流でも、欲が出てそれほど疲労もせず、順調に生活が続いていたが、ある日、二番方

の作業が終わり休憩場に戻る途中、脱線した空炭車の車輪に足を轢かれ、みるみるうちに腫れた。一応、係員と昇坑の際に検診係に届け、帰宅し就寝前に湿布薬を塗布して休み、翌朝自己判断で局部は腫れているが骨に異常無しと思いい、出勤時間に繰込場で面倒な公傷（労災）手続きは省略して、簡単にメモ用紙に保安部係長宛に、小生が習い覚えた医学用語で軽作業願を書いて貰い、即刻就業を承諾され出勤扱いとなった。採炭経営も厳しくなり、薪物切りの軽作業は廃止され、保安部事務所内の雑作業（小使役）に変わり、病院での公傷係の証明で来たものは、堅苦しい事務所内に控えているのが苦痛で、自ら二、三日すれば現場に戻る状態であった。

軍隊では、兵舎は各内務班に分かれていた。陸軍病院で初年兵の看護学教育期間は、内務班での行事は、起床十五分前に起き、厠（トイレ）、洗面所、兵舎出入り口掃除は水流しでなく、節水のためか、全て雑巾で拭き上げねばならなかった。炊事場への飯上げ、食事の準備、食後の食器洗い、古参兵、班長の衣服の洗濯など叩かれ、殴られて仕込まれて来た経験があり、事務所内での雑役など朝飯前の仕事で、事務所職員の出勤は午前八時で、その二十分前に自分只一人で机上拭き等、事務所内の掃除、お茶出しまでやり、三日後には職員の作業内容も分かり、係長、次席職員の机上には自費購入の花束を花瓶に生け、又、繰込場の安全祈願の神棚の穂の入代えなど先手を打って行い、門衛、検診係の欠員の時には代役するなど小回りが効き、何かと役立ち、重宝便利であるためか、現場復帰の声は掛からず四ヶ月が経過した。給料は、經理担当の好意で坑内賃金とは差がなく、保安部に欠員が出来れば居座れると内心思いつつ、雑役に励んでいた。

保安部の仕事に、坑内で使用の火薬（ダイナマイト）を坑外の火薬庫から受領し、坑内の火薬庫に運ぶ運搬作業があり、リヤカー二台に各三名が付き、一人の責任者が点火用信管を持ち、計七名で毎朝火薬庫へ、全員定年間際の老人で、一名退職するその補充員にされる事になった。それには保線現場の担当係員の離職認可が必要だが、現場は合理化で人員整理やレッドパージ等で自然減少になり、人手不足ではあるが長澤は坑内夫として不向き人物と思われたか、保安部からの要請ならと気持ちよく許可された。老人仲間の楽な火薬運搬夫になり賃金は下がったが、別途収入が多いので、給料袋はそのまま郵便局の定額貯金行きであった。

坑内名義で楽な火薬運搬が二年続いたが、合理化で火薬庫より坑口までトラック輸送になり、リヤカー運搬は廃止され、坑外運搬の代替として坑内作業が追加され、入坑もトラック到着の午前十時に入坑し、昇坑が午後五時以後となり、石鹼卸が不可能になるため、作業現場を午前七時入坑の常一番の通気係だと、昇坑は午後二時で副業の石鹼卸が充分出来た。しかし、良質の石鹼が出始め、売れ行き不振となったので、小売店とは顔なじみのため、菓子卸に転業しても副業の収入は維持できた。通気係に変わったが新参扱いではなく、採炭現場に風を送る風管延長や、排気道に溜る炭塵の延焼爆発防止、また炭塵押さえに岩粉（石灰のような石粉）の振りまき、ガスの吹き出る隙間への粘土の充填などが主な作業で、昇坑後入浴し、商売出発は三時、帰宅は午後七時前後で、翌日午前七時には入坑したものです。

当時、ブラザーミシン一〇三型（工業用）を現金で買ったのが縁で、戦後南洋パラオ本島から引き揚げた店主と親しくなり、店主の世話で、廃業した食堂を譲り受け、改装して菓子小売店を母と妹の店番で開店し

たのが、昭和二十八年四月で、わが家としての生活も安定した八月に、第二次合理化の希望退職の募集があり、担当係員に惜しまれつつ退職した。

北朝鮮から引き揚げ、ドン底の生活は、三井炭坑の皆さんの温かい援助のお陰で立ち上がり、待望の退職が出来た事を、紙上を借り心から感謝しお礼を申し上げ、筆を止めます。